

宗教も要らぬ、墓も要らぬ



第一生命経済研究所 名誉所長

加藤 寛

100歳以上の行方不明者が全国で続出しているという報道をみても、さして驚かないのが現代なのかもしれない。石原都知事は、「姥捨て山に行って捜したらいいんじゃないか」といつていたが、日々増えていくこの数字をキョトンとした感じで見ている自分が不思議でならない。

実は私もすでに84歳。100歳を超えるなどあり得ないとさえ思っている。そう思いながらも他人事でない気がするの、私だけだろうか。

第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部に、かねてから人間の死について研究している小谷みどりという研究者がいる。もう、20年以上も研究しているので同氏は、この分野の第一人者で博士号も持っているという泰斗である。小谷氏の研究によると、これまで慣習として墓参りなどの儀式が行われてきたことにより、死後のことを考えると不安だという思いが軽減されてきた。一方、現在ではそうした慣習に疑問をもつ人が増え宗教離れが進んでいるという。葬式のやり方も色々あって音楽葬をする人。葬式そのものを拒否する人。自分の墓を生前から建立するのはよくあったが、今では墓に入ることを好まない人もいるという。散骨を望む人も多い。要は形式ばったやり方を好まなくなっているのだ。一字いくらという戒名がそもそも気にいらぬ人も増えているという。

そうした流れをみていると、死ぬときまで他人の世話になりたくないという人が増えているようだ。生まれてくるときと死ぬときは自分では何も出来ないから他人に感謝して世話になれという意見もあるが、だからこそ死ぬときまで他人の世話になりたくないという人も決して少なくない。まして昨今のように脳死とか介護という問題が

増えてくると、意識のないまま長生きしたくないと望む人はかなりあると思うが、自らの意識がなくなった状態で選択するのは難しい。

最近やっと改正臓器移植法に基づき、家族の承諾で脳死と判定された男性の臓器移植が行われたが、判断はなかなか難しい。そこで、介護など考えると、他人に迷惑をかけずに死ねたらというので、八十八カ所巡りなど古来のピンピンコロリ方式が流行したりする。

今だからいうが、私の父親は73歳の時、自殺をした。以来、私はその事実が理解できなかった。事業がうまくいかなかったわけではなく、むしろ順風満帆で豊かな生活をしてきた。その彼がなぜ死を選んだのか私には理解できず、ずっと思い悩んだことがある。自殺とは人に迷惑をかけないわけではない。何故なら、親族に悩みを与えるからである。しかしその父の苦悩が、私もその年を越えた今、次第にわかってきた。父はいつも口にしてきた「意識もなく世話になってまで生きていたくはない」と。私たち親族から見れば、父の介護は当たり前だと思う。しかしそれを嫌だとなればどうすればいいのか。身内からすれば他人の世話になるわけではないのと思うが、最近の老老介護で、共疲れから死を選ぶ人がいるのを見ると考えさせられる。子どもがいればいいが、その子どもが離れていっては老夫婦だけではどうにもならない。その面倒を社会で見ればというのはとても難しいことだ。死を覚悟した高齢者達が他人の世話にならずにと考えたら、自ら死を迎えるしかないのか。このような高齢者達に、この国は、安心した死に場所を提供することができないのか。

象でさえ最期は自分で死に場所を探して、姿の見えない所で死ぬという話を聞いたことがある。昔は姥捨て山に親を連れて行ったのかもしれないが、現代では高齢者が象のように自ら死に場所を探す時代になったのかもしれない。自ら姿を消した人を追いたくないという家族の気持ちもあるだろう。現代は死後を恐れるのではなく、死後を楽しむようになったのだろうか。いずれは墓も無用の長物となる日がくるのかもしれない。